
兄妹

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄妹

【Nコード】

N8299Z

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

「ほんとうのこころ」の続編です。蘭が小さくなって新一が子供のお世話の仕方を学ぶという感じの作品です。一部、新蘭、平和、快青になっています。どんな方でも楽しめると思いますので…。これは続編ですので、先に「ほんとうのこころ」を読んだほうがいいと思います。

工藤蓮華（前書き）

続編ですので、ちょっと変なところがあると思います。

工藤蓮華

「お兄ちゃん、私の学校は？」

「確か：帝丹小学校だったな…おれの母校だな。」

「お兄ちゃん、料理できないでしょ？また、作ってあげる。」

「へいへい。」

「はいは一回ときちんとすること。」

「すみません」

「よろしい」

小学二年生の少女と高校二年生の青年。

ここ、工藤邸ではこんな会話があった。

そこに、茶髪の高校2年生の女子が勝手に入ってきた。

「工藤君、妹さんの名前だけど…」

「蘭、だろ？」

「ちがうわ。一ヶ月間の間だけ、違う名前にしてほしいの。」

「なんでだ？」

「仕方がないわ。とにかく、この世に工藤蘭は存在しないということ

で、工藤…そうね、なんて名前がいいかしら？」

「おい、蘭。なんて名前がいい？」

「そうねえ…蓮華がいいな。」

「蓮華…か。いいぞ。」

「お兄ちゃんは新一でいいの？」

「ああ、そうだよな？」

「ええ、もちろんよ。」

三人の会話は冷めているのかあきれているのか分からないような会話だった。

大きな長い声が工藤邸に響き渡った。
そして

ドタバタと大きな音の足音がリビングに向かってくる。

「へ？」

「は？」

リビングにいる新一とキッチンにいる蓮華が2人して驚いたようなまぬけな声を出した。

バタンツ

またしても大きな音がリビングのドアを開けた。

「し、新一君！蘭は！？」

「えっと、蘭は……」

志保の言葉を思い出す。

しかし、園子には事情を話すと言っていたので、本当のことを言ってもいいと思ったのか、蘭が蓮華になったことをすべて話した。

「それで？蘭、蓮華ちゃんはどこにいるわけ！？」

「キッチン。もしかしたら、おまえの記憶、ねえかもな。」

「蘭！蘭！……！」

新一の言葉を聞いたのか、園子は急いでキッチンへと向かった。迷いもせず向かったキッチン。

そこには、かわいらしい小さい頃の蘭がいた。

「蘭…」

「…園子…」

「蘭…呼び捨てに…」

「お姉ちゃん…？」

「ガクツ…」

呼び捨てで呼んでくれなかった蘭に園子はガクツと頂垂れた。

「園子お姉ちゃん、どうしてここに？」

「蓮華…ちゃん、あなたは、工藤蘭…ね？」

「そう…だよ？」

「なら、あなたは蘭でいいのね？」

「どうしたのさ、みんなで。」

「いいの、いいの。こっちの話。」

「おかしいね、そこに隠れてるんでしょ？和葉お姉ちゃん、平次お兄ちゃん、青子お姉ちゃん、快斗お姉ちゃん…じゃなくってお兄ちゃん。」

蘭がキッチンの柱に隠れてる四人を呼んだ。

そして、見事に四人いた。

「あのなあ、蘭ちゃん、俺は、お姉ちゃんじゃないぞ？お兄ちゃんだ。」

「だって、いつもお姉さんのカツコして私やお兄ちゃんに会いに来るじゃない。」

完全に子供の蘭。

女子群は可愛いと思い、男子群は頂垂れている奴もいれば感心している奴もいた。

「蘭ちゃん、ほんま可愛えなあ！」

「ほんとほんと！青子と大違い。」

2人は嬉しそうに見ていたが、園子は怒りに震えていた。

「たしかさあ、これ作ったの志保だったよね？」

怖い声を出して窓から見える阿笠邸を睨む。

その様子に蘭はビクツと肩を震わせた。

「志保お姉ちゃんが…どうかしたの？」

「あなたの体を…!!!」

園子の説明を後ろにいた志保が口を手で覆った。

「園子、私を憎んでるみたいね。」

「はたりまへでひよ！ひゃんをひいはくひはんはから！」

(正しくは「当たり前でしょ！蘭を小さくしたんだから！」です)

「何言ってるのよ…」

志保はあきれ半分で園子を離れた。

園子は息切れしたらしく、息が荒かった。

「志保、私を殺す気!？」

「そうね、そのほうがよかったかもね。」

「志保おおお!？」

「冗談よ。」

冗談とは見えないそぶりで蓮華に近づくと志保。

「蓮華ちゃん、阿笠邸に来てくれるかしら？」

「阿笠博士、いる?」

「もちろんよ、そのために呼んだんだから。」

「おい、何の騒ぎ…はあ!？」

新一がやつとキッチンに来たが、志保、園子、平次、和葉、快斗、青子が勝手に入っているということで新一は驚きと怒りを隠せない様子だった。

「お前ら…勝手に…」

「ええやんけ、俺ら親友やる?」

「新一、そうやって怒るから私が嫌いになるのよ! (蘭の声)」

快斗が蘭の声を使ってしゃべったことにより、新一の頭にある火山は噴火した。

数時間の男の悲鳴が工藤邸に響き渡る…

工藤蓮華（後書き）

誤字脱字、教えてください。
感想待ってます。

帝丹小学校にて

「はい、みんな、今日から新しいお友達が来てくれます。女の子です。」

小林先生はそういうなり、黒板に「工藤蓮華」と書いた。

工藤蓮華と読めない人のために「くどう れんげ」と隣に書いた。

「はい、入ってきていいわよ！」

先生が教室のドアに向かって話しかける。

転校生、工藤蓮華は小さな手でドアを開けて、コツコツとはいつてきた。

「ク、工藤蓮華です。よ、よろしくお願いします。」

「よ、よろしくー！」

男子たちは顔を赤くして一斉に言った。

なにせ、蘭が小さい頃ですからとてもかわいいのである。

女子の半分が「よろしくー！」と言っていたが、もう半分のほうは嫌味のような目つきで蓮華を見つめていた。

「なんかさあ、かわい子ぶってない？」

「うんうん」

「江戸川君さえいてくれればなあ……」

「そうそう。江戸川君がいなくなってからさあ、私たち相当変わったよね？」

「そういえば、少年探偵団……とかいったっけ？」

「ああ、あの人たちね。」

グループの人が一斉に元太、歩美、光彦を見る。

視線を感じたのか、歩美がそのグループのほうへ目を向けた。

しかし、そのグループはフンツとそっぽを向いた。

「江戸川君にもう一度会いたい……」

「ええ」

グループはそんな会話をして授業に取り組んでいった。

休み時間になると、蓮華の周りは男子でいっぱいだった。

「ねえ、好きな色は!？」

「赤だよ？」

「好きな動物は？」

「たいてい、全部好き。」

「むこうの学校に友達いた？」

「えーっと…いたかな…」

そんな質問攻めに蓮華はサラリと答えていった。

しかし…

「じゃあさ、蓮華ちゃんに好きなこいた？」

「好きな…人？」

いたような…

いなかったような…

一緒にいたような…

あれ？

思い出せそうなのにな…
思い出せない。

そして、お兄ちゃんの顔が浮かんでくる。

どうして...？

「んげちゃん？

蓮華ちゃん！」

ハッ...

気が付いたら目の前にはどこかで見たことあるような顔の子がいた。

「あなたは...」

(・・・ちゃん!いごうか。)
(・・・おねえさんはーお兄さんのこと好き?)
(・・・君のこと好き?)

なんだろ…今の…。

「私の名前は、吉田歩美。あなた、蘭お姉さんに似ているね!」

「確かにそうですね!」

「蘭お姉ちゃん知ってるか?」

「蘭:お姉ちゃん?」

聞いたことある…いいえ。私の本名。

工藤蘭。

「どんな人?」

「毛利蘭と言って、すっごく美人さんなの。」

「新一ちゃんの恋人だよ!」

「新一:お兄ちゃん?」

「そう!蓮華ちゃんが大人になった感じ!」

「そう…なんだ…」
新一お兄ちゃんの恋人さん…

あってみたい…

こうして、私の生活は一週間過ぎて行った。

帝丹小学校にて（後書き）

感想待ってます！

久しぶりの再会

「工藤君、これをのんで。」

志保が新一に薬を渡す。

その薬は名無しのおの薬。

新一はわからないまま志保によって飲まされてしまった。

(うあ…)

新一は心の中で悲鳴を上げてその場に倒れた。志保はそのまま倒れさせたままにして、新一の様子をうかがっていた。

数時間後

「ん…？」

「ここは…どこ…いや…俺の家だ…」

蘭は？

「工藤君」

「宮野？」

「蘭のことだけだ。」

「蘭に何かあったのか!？」

「いい？今からいうことは受け入れることはできないかもね。蘭さんはあなたの妹になったわ!」

「はあ？蘭は俺の彼女だっつーの!」

この会話で分かっただろうか？

新一は志保が解毒剤を飲ませたおかげで元の正常に戻ったのだ。

「もうすぐ蘭が返ってくるわ。」

数十分後・・・

ガチャッ

「ただいまー！」

なつかしみのある声が工藤邸に響き渡った。

「蘭…?!」

新一は半信半疑のまま玄関へ向かった。

そこには小学生のころの蘭がランドセルをしょって玄関に立っているのだった。

「蘭！？どうして…！」

新一は何がどうなっているのかわからず、ただあたわたしているだけだった。

「お兄ちゃん？」

「はぁ？ 蘭、どうして…」
「どうかしたの？」

新一は言葉を失った。

蘭は新一の妹と勘違いしている。

「工藤君、ちょっと。」

志保は無理やり新一をリビングにつれて今までのことを話した。

「そう…だったのか…」

「工藤君、蘭はあなたのことをお兄さんと思っているわ。これ。」
志保がカプセルを新一に預けた。

「これ…蘭があなたのことを兄とは思う薬の解毒剤。」

「APT X 4 8 6 9のは？」

「一カ月で終わるわ。そうね、あなたもAPT X 4 8 6 9をのんで。」

「はあ？」

「蘭一人にさせるの!？」

「いや……」

「なら、ちゃんと飲んでね。」

志保はそういつと工藤邸から出て行った。

「らん！」

「何？」

「これ、飲んでくれ。」

「どうして？」

「いいから……」

「う、うん……」

蘭は水とともにその薬を飲んだ。

(いや……なんか……いやあああああ……!……!……!)

蘭はその場に倒れ数時間の眠りについた。

数時間後、蘭は目覚めると自分の体に異変を感じた。

高校生のはずがなぜか肌がふんわりしていた。

目の前を見てみるとそこにはコナンがいた。

「こ、コナン君!？」

そんなはずはない。

コナン「新一

なのだ。

なのに…どうして？

「コナン君…どうして…ていうか、私…」

「蘭、俺たちは小さくなったんだ。」

「解毒剤は？」

「いや、一か月間かかって戻るらしい。」

「よかった。」

「お前は、工藤蓮華。おれは江戸川コナン。」

「じゃあ、よろしくね、コナン。それと、どうせ、志保が作ったんでしょ？」

「正解。」

新一の言葉に蘭は浅いため息をついてコナンに抱き着いた。

「わっ！」

新一、いやコナンはいきなりのことので驚いた。

「コナン君に会えた…よかったあ…」

蘭の目には涙がいつぱいだった。

コナンは優しく蓮華を包んで揚げた。

その後、先ほどのことを大阪カップル、江古田高校カップル、園子に伝えた。

久しぶりの再会（後書き）

感想待ってます！

江戸川コナン、再登校

「コナン、行こうよ！」

「ったく…よく教科書とか残ってたよな…」

今日から新一は江戸川コナンとして小学一年生として帝丹小学校に通う。

もちろん、蘭も一緒だ。

蘭、蓮華はコナンもいることにより、安心感があつた。

「コナン、歩美ちゃんたちに会いたかつたんでしょ？」

「まあ…そうだな…」

コナンは久しぶりに会えるという気持ちでうれしいようないやなような複雑な気持ちになっていた。

帝丹小学校の登下校の道を歩いていると少年探偵団が2人のもとにやってきた。

「蓮華ちゃ…」

「蓮華…?」

「蓮華ちゃん…?」

みんな蓮華のほうを向いていたが、蓮華の隣にいる男の子を見た途端、彼らは確信した。

「コナン君! (コナン!) (コナン君!)」

江戸川コナン、一年前に帝丹小学校に通っていたが、一年後、すぐに姿を消した。

灰原哀とともに…

しかし、歩美が蓮華とコナンが一緒にいるのに目を向ける。
どうやら、蓮華をライバルだと思ったらしい。

「蓮華ちゃん、コナン君と知り合い？」

「え…えーっと…」

「友達…って言ったほうがわかりやすいかな？」

「ふうーん…いつ出会ったの？」

「へ？ああ…一週間ぐらい前だったかな？」

嘘

本当はずっとまえから。

幼馴染だから17年間ずっと一緒にいる。

2人は全然違うことを話している。

しかし、それが歩美にとっては好都合だった。

(蓮華ちゃんより…歩美のほうがよくコナン君のこと知ってる。)

そう思った歩美はコナンにいきなり抱きついた。

「コナン君！会いたかったよぉ〜！」

二年生になった歩美はこういう計画を立てられるようになった。

コナンが今でも好き。

大好き。

自分を守ってくれる人。

だから…だから…

蓮華には負けられない、そういうおもいが歩美の心を換えて行った。

「お、おい、歩美ちゃん！」

コナンは嫌がっている。

それを見た蓮華が

「歩美ちゃん、コナンが嫌がってるよ？離してあげたら？」
と優しく言った。

『コナン』と『コナン君』

歩美はその違いに気づいてしまった。

たった一週間の付き合いでどうして呼び捨てなのか。

コナンは嫌がってないのか？

そう思った時、歩美はすぐさま泣いてしまった。

「う、ウエええん!!！」

「あ、歩美ちゃん!？」

「歩美？」

少年探偵団とコナンと蓮華はいきなり泣き出した歩美にあたわたり
ていた。

「とにかく、落ち着かせよう！」

蓮華はそういふなり、歩美の手を取って学校へ走って行った。

学校に着くと、2人が走っているので見ると人はすごく振り返りながら登校していた。

2人は走って保健室へ行くと、保健の先生が優しいまなざしで歩美が泣きやむのを待っていた。

蓮華も同じだった。

蓮華は、体が小さくても心は高校生。

面倒見のいいお姉さんなのだから優しい目をして歩美を見ていた。

「工藤さんだったらなんだか高校生に見えるわね…」

「え？」

蓮華はギクツと思いつつ一生懸命違うと言っていた。

保健の先生は「はいはい」と優しく言ってくれた。

先生の年代は50。

おばさんなのでみんなから好かれている。

そんな会話をしているうちに歩美が泣きやんでいった。

すると、歩美はいきなり蓮華の腕を引っ張って

「私…蓮華ちゃんに話があるんです…っすみませんでした…っ」

半ば泣いていたが先生は不安がらずに「わかりました」といった。

歩美が蓮華の腕を引っ張って人気のないところに連れていくと同時にチャイムが鳴った。

蓮華はやばいと思ったが歩美がかまわず話し始めた。

「蓮華ちゃん…歩美はコナン君のこと好き。」

「歩美ちゃん…」

「蓮華ちゃんはどつなの？歩美、蓮華ちゃんのことよく知らないけ

ど、蓮華ちゃんのこと、ライバルだって思う！」

「私も好き…大好き！コナンは私を命がけで守ってくれたし…」

「それだけ？それだけで好きになったの？」

「それだけ…ってわけじゃないけど、コナンの全部が好きだな…」

「え…？知ってるの？コナン君の全部を…」

「さあ…あいつのことは全部知ってるつもり。」

蓮華はそういうとにっこり笑って歩美の手を引き、教室へと向かった。

(蓮華ちゃんのばか…)

歩美はそう思うと同時に蓮華を階段のところで突き飛ばしていた…

江戸川コナン、再登校（後書き）

感想待ってます。

事件

「キヤ・・・」

蓮華は小さな悲鳴を上げた。

それはその場にしか聞こえないような声。

蓮華は気を使った。

本当のところ、大きな声を出しているところだが、大声を出したらみんなが来てしまつて歩美に被害がかかる、そう思うと蓮華は静かに目を閉じた。

スローモーションのように蓮華は下へ下へと落ちて行った。

「蓮華ちゃんの…せいなんだから…っ」

歩美はそういふなり蓮華をそのままにし、その場を去って行った。

「歩美…ちゃん…ごめん…ね…」

小さくほほ笑むと蓮華は目を閉じたまま意識を失った。

蓮華一人、会談の一番下で倒れていた。

歩美は走って教室へ向かうと歩美の計画は始っていた。

「先生！大変なんです！蓮華ちゃんが…っ蓮華ちゃんが…っ」
歩美は演技で大変そうに言った。

「蓮華がどうかしたのか!？」

一番最初にいったのはコナンだった。

歩美はそれに傷ついたがそれを隠して事情をすべてコナンに話した。
コナンは事情を聴くと走って会談へ向かった。

「蓮華!?!」

コナンは蓮華に近づくと頭から血を流している蓮華がいた。

「おい、しっかりしろ！蓮華！」

「…し…新…?」

「蘭…よかった…今すぐ保健室に行くぞ!？」

「ごめんね…」

コナンは蓮華をおんぶすると走って保健室へ向かった。

保健室では大騒ぎとなった。

「蓮華ちゃん、誰かに突き飛ばされた覚えは？」

「……」

蓮華は答えようとしない。

歩美のせいにすれば歩美が苦しむ。

「私が勝手に転んでしまっただけなんです……。」

「本当なの？」

「はいっ……そうに違いありません。」

「そう……よかった。」

先生は安心して蓮華の話を聞いていた。

しかし、蓮華は知っていた。

歩美が自分をつき落とし、殺そうとしたことを……

「蓮華！大丈夫か？」

「うん！全然平気！」

蓮華はにっこり笑ってそういった。

捜査開始

しかし、コナンは誰かが蓮華を突き落したのだと確信していた。

たしかにドジっばい蓮華だが、階段から落ちてもあそこまで大量の血が出ることはない。

病院は行かなくても大丈夫と言っていた蓮華だが、やはり痛そうだ。

(おかしい…)

コナンはそう考えていると一人の少女にぶつかった。

「あ…ごめ…?！」

「あら…」

「灰原?!」

そう、そこには宮野志保のはずの灰原哀が立っていた。

コナンは何が何だか分からなくなって頭が混乱寸前だった。

「ごめんなさいね、驚いたでしょ?」

「驚くも何も、どうして…」

「工藤君、説明はあと。蘭が階段から落ちたんですってね。」

「あ、ああ…」

コナンは哀の言葉に少し言葉が詰まった。

ほんとうは違う、そういいたかった。

「あら…なんだか違うみたいね。」

哀はわかったようだ。

しかし、コナンは半信半疑のまま哀に自分の意見を話した。

「たぶん…蘭は何者かによって突き落とされたんだ。」

「蘭は…知ってるんでしょ？」

「多分…な。」

「どうしてそれを言わないのかしら？」

「庇ってるんだろ…あいつ、そういうお人よしだからな…」

コナンの言葉に哀は同情した。

確かにそうだ。

蘭は人が苦しむ姿を見たくない。

だからこそ、命を張ってもその人を守り抜く強さがある。

そういう優しさは時に、憎しみを持たせてしまうのである…

「とにかく、蘭に会いに行くわ。確か…蓮華、よね？」

「ああ、そうだ。」

二人は急いで蘭のいる2・Bの教室に向かった。

「蓮華！」

「あ…し…じゃなくて…」

「哀でいいわ！」

「どうして…?」

「あなた、階段から落ちたらしいわね。」

「うん…なんかドジっちゃって…」

蓮華はテヘツと頭をこすった。

でも、それは作っていると二人は同時に思う。

蓮華は庇っている。

犯人をかばっている。

そんな時コナンのファンらしき人がコナンに近づいた。

「コナン君！戻ってきてくれたのね！」

「わたしたちのコナン君！」

「キヤーーッ！」

コナンファングループがコナンに抱き着いてくる。
しかし、それは蓮華への見せつけ。

コナンと仲が良いことによりそうやっての嫌がらせが蓮華を襲う。

「やめるよっ！！」

考え中だったのか、コナンはいつもよりも不機嫌だった。

しかも、この中に犯人がいるかもしれないというのに…。

しかも、最愛の蓮華、いや蘭が階段から突き落とされたのである。
ジツとしていられないはずだ。

「こ、コナン君…?」

女子たちも当然の驚き。

今までに見せたことのない表情だったからである。

「そりゃそうよ！コナン君は今、考え事してるんだから！」

そういったのは歩美だった。

そういつてコナンに自分のほうを向かせようとの作戦。

歩美が蓮華の目の前を通った時、蓮華は悲しみと怖さの複雑な表情
を見せたのを哀は見逃さなかった。

「あ！哀ちゃん！会いたかった〜！」

歩美はそういふなり哀に抱き着いた。

哀は少し力を込めながら抱きしめてあげた。

蓮華はそれを見ると、そつと教室から出ようとした。

コナンの合図とともに哀は走って蓮華を呼び止めた。

「蓮華、ちよつと話があるわ」

「哀……」

蓮華は哀に手を引つ張られ、廊下で話を始めた。

「単刀直入に言うけど、あなた、もしかして吉田さんに突き落とされたんじゃないの？」

「何を…っていうか、どうして私が突き落とされたって知ってるの？」

「突き落とされたの？」

「あ…っ」

蓮華は口走ってしまった。

自分が何者かに突き落とされたということ。

「突き落とされたのね…」

「それよりも、どうして志保が小さく？」

「これは48時間の薬。二日間この学校にいるつもりよ。それで、久しぶりに学校に立ち寄ったら大騒ぎになってたから先生を呼び止めて聞いてみたってわけ。」

「どうして？どうして小さくなったの？」

「実験よ。48時間・・・薬が切れるか切れないかっていうね。」

「そう…」

蓮華は少し不安げの顔をして哀を見つめた。

「ん？何？」

「もし、今薬切れちゃったらどうするの？」

「大丈夫、24時間は確実だから。」

「よかった。」

蓮華は安心感でいっぱいになった。

しかし、どこか複雑である。

やはり、あの階段事件である。

「それで？誰がやったの？」

「・・・言えないよ・・・」

「言えないってことは友達ね。」

「え・・・」

「あなたは誰にでも優しくするけど、いつときは言うわ。ただし、知らない人をね。」

つまり、クラスメートと考えられるわね。そして・・・そこからあなたが吉田さんとすれ違った時の表情。吉田さんが関係あるみたいね・・・」
志保の推理は大当たり特等だった。

蓮華は何も言えずただ、うつむいているだけだった。
志保は痺れを切らし、どうにか吐かせようとした。

「蘭、お願い、あなた・・・自分を傷つけた人を許せるの!？」

「・・・」

「・・・工藤君・・・許さないわ・・・あなたを傷つけた犯人ひとを・・・」

「・・・」

「黙ってないで・・・本当のこと言って・・・私はあなたが苦しんでいる姿が一番嫌なの・・・!お願い・・・言ってよ、蘭。」

「・・・新一が・・・おこるでしょ・・・?」

「蘭・・・?」

「新一が・・・その人のこと許さないでしょ?」

「そうね・・・そうかもしれないわね・・・」

「だから言えない!新一が・・・おこるのが一番嫌!その人がかわいそうだし・・・新一に余計な心配かけちゃうもん・・・」

「蘭・・・」

蓮華の言葉に哀は何も言えることはなかった。

そのまま、犯人の名前は出ることがなく、時は過ぎて行った。

捜査開始（後書き）

感想待ってます！

推理

コナンは蓮華が付き落とされたとみられる、二階の階段の真ん中にいた。

きつとここで突き落とされたはずだ。

コナンはそういうと、どこからか、虫眼鏡を出してそつと階段のところにあつた上履きでこすつたような跡を見つけた。

学校の怪談ではたいてい、児童がけがをしないように角の所にカバ―みたいなのをしてある。

そこにこすれたような青いかすとともに跡があつた。

「やっぱり上履きのもんだ。かずかだけど、ゴムつぽいのがる。」

「やっぱり…この学校の児童みたいね。」

「ああ…青い上履き…そう、俺達の学校では上履きのみ先の部分が青くなっている。たぶんここで、蓮華は突き落とされたんだ。これは…犯人のものか、蓮華のものか…。」

「可能性としては蘭のほうが高いはね。」

「そうだな、突き落とされたときにこすれたものか、何らかの原因に犯人がつかまらなかったか…。」

2人して一生懸命考えていた。

蓮華、いや蓮華のことだから、2人は一生懸命になるのは無理ないだろう。

「蓮華…吐かなかつたわ。」

「やっぱりな。蓮華はそういう奴じゃないからな…。」

「…あなたが怒るからって…。」

「へ?」

「あなたが怒鳴って怒るから…犯人に怒鳴り散らすから…蓮華はそれを見るのが一番嫌なんだって。」

「…。」

「蓮華は…あなたが大好きでしかたないのよ。あなた、付き合ってるんでしょ？」

「ああ、俺も…愛してる。」

「そうなら…蓮華が思っていること、理解してあげたら？」

「でも…」

「あとは、あなたの勝手にして。犯人…わかっているはずよ？証拠はなくても…私にもわかってるわ。」

哀はそういうなり、その場から立ち去って行った。

窓から見える、太陽に光がコナンを照らし出す。

すべては空が知っている。

でも、しゃべりはしない。

だから、自力であぶりだすのだ。

最愛の人を傷つけた、最低な奴を…。

「コナンくん！」

そこへ、歩美がコナンのもとへ走ってきた。

「あ、歩美ちゃんか？」

「コナン君！蓮華ちゃんは？」

「…さあ？」

「そう…」

「なあ、歩美ちゃん。蓮華を見つけた時、どこにいた？」

「どこって…保健室よ。」

「二階から落ちたんだぜ？蓮華は歩美ちゃんを迎えに行つたんだ。

歩美ちゃんと一緒に教室行つたときに蓮華が転んだとしても、落ちたのは人間では速いスピードだ。しかも、どうして悲鳴を上げなかった？そして、たくさん呼びかけるはずだ。少年探偵団だろ？それぐらいはできるはずだぜ？」

「そ、そんな暇なかったの。とにかく、教室に行こうって…」

「どうして、会談のすぐそばにある、特別学級の教室にいる先生に

「いわなかった？」

「い、いなかったのよ……」

「いや、いたさ。先生に確認したところ、その時は児童と折り紙をしてたそう。音は聞こえたが、あまり気にしてはなかったらしい。」

「何が言いたいの……？」

「つまり、歩美ちゃんが蓮華を突き落としたんじゃないかって。」

「コナンの言葉に歩美は言葉を詰まらせた。」

「確かにコナンの言うとおりだ。」

「特別学級の先生に言うほうが一番速くて一番保健室に近いのに、どうして、二階にある、2・Bの教室までいったのだろうか。」

「し……証拠は?! 私がやったっていう証拠は？」

「歩美ちゃん……蓮華がいるよ。」

「……!」

「蓮華……歩美ちゃんとすれ違った時、哀しいような怖そうな顔してたんだ。あいつがそんな顔するのは不安な時、そいつに何かされた時だけだ。俺は、歩美ちゃんを仲間だって思ってたぜ？」

「私だってそう思ってるもん! だからそんなことするはずないじゃない!」

「蓮華が……犯人のことを言ったら？」

「……」

「蓮華は……俺が頼めばいつてくれるよ……」

「コナンは静かな声で言った。」

「歩美は荷も言えず、ただ、黙ってうつむいているだけだった。」

「蓮華ちゃんが……憎かったのよ……蓮華ちゃんなんか……いなくなっちゃえば……いなくなっちゃえば……よかったのよ……。コナン君と親しい蓮華ちゃんが、コナン君のことを呼び捨てにしている蓮華ちゃんが、コナン君のことを知っている蓮華ちゃんが、大大大嫌いだったのよお!!! 蓮華ちゃんより、私のほうが先に出会ったんだし……!」

「先に出会おうが、俺は……蓮華を愛してるよ……」

「コナン君…！」

コナンの言葉に歩美は動揺を隠せなかった。

コナンは少し顔を赤くして天井を上げた。

歩美にはどう見えてものろけにしか見えないことだった。

「悪いけど、蓮華はおまえが犯人とはいってないんだぜ？」

「え？」

「蓮華は言わないぜ？そういう優しさがあるからな。」

「どうして…？私悪いことしたのよ？」

「蓮華はそういう奴なんだ。」

「バカだな…」

歩美はそういうとごめんなさいと泣いて謝り、蓮華の居場所を聞いて、謝りに行った。

蓮華は歩美の言葉に笑顔で受け止めた。

そして、

「これからも仲良くしよう?!歩美！」

といったのであった。

歩美には考えられないことだった。

怒られるかと思っていたはずが、仲良くなろうと笑顔で言われ、ついに呼び捨て…。

歩美は泣きながら笑顔でうなづいた。

ここで、一つの友情が芽生えた。

(蓮華ちゃんって…蘭お姉さんに似ている…)

推理（後書き）

歩美ちゃん…気づいてしまうのか?!

次回は明日!

感想待ってます!

実験の続き

蓮華とコナンが縮んで、二週間がたった時だった。

歩美がにっこりしながら蓮華とコナンに近づいてきた。

蓮華は何か話があるのだと思って、歩美と目を合わせる。

逆に、コナンは蓮華の、「階段事件」により、歩美を避けている。

「蓮華！よかったら明日の土曜、6時に博士の家に集合のトロピカルランド行かない？コナン君…も！」

あの事件があつてから、蓮華と歩美は呼び捨てで呼び合うようになった。

歩美は、コナンも一応誘ったが、まだ不機嫌らしく、あまり、歩美の言葉を聞いていない。

「うーん…お父さんとかに聞いてみる。」

「そっか！じゃあ、行けたら私の家に電話して！はいっ、電話番号！」

歩美はすぐに自分の家の電話番号を紙に書いた。

蓮華はそれを受け取り、自分の筆箱の中にした。

教室には、女子が、校庭には男子が大勢いる。教室では、二年であるうとも、恋バナ、友バナなど、たくさんしている。

その中に、蓮華と歩は仲良さげにしゃべっているのだった。

「そっいえば、哀ちゃんは？」

話の途中に、歩美がつぶやくような声で蓮華に言った。

「え…？ああ…哀はちよつと、用事があるからって転校っていうよ…り…休学かな？」

「キユウガク？」

「ああ、学校を長い間休むってこと。」

「ふうーん…博士の家にいるかな？」

「へ…？さ、さあ？私にもわからない。」

まさか、宮野志保に戻った、なんてこと言えるはずがない。

蓮華はそう思いながら何とかごまかしていた。

歩美はまた、不振がらずに、会いたいなという気持ちを大きくしていた。

「ねえ、コナン！ トロピカルランド、行こうよ！」

「俺はいいって。」

「何よ…じゃあ、ご飯作ってあげない。」

「あ！ 行きます行きます！」

コナンの言葉を聞いて、蓮華はジト目でコナンを見つめた。

そんなこんなで、土曜日、トロピカルランドへ行く日が来た。

蓮華とコナンは、毛利探偵事務所（コナンは居候、蓮華はもともとの家）住んでいた。

蓮華が父、小五郎にお願いと頼み、小五郎は、小さい頃の蘭のかわいさに負け、そくOKしてしまった。

小五郎は、2人がいない間に麻雀へ行こうとしたが、そこへ、蓮華、（蘭）の母、妃英理がきてしまい、麻雀へ行くことはなかった。

阿笠邸前

蓮華とコナンは走って阿笠邸前に向かった。

集合時間まであと五分。

2人は全力疾走で向かって言った。

「ハアハアハア…」

2人が、阿笠邸間に着いたのは、六時ぴったりだった。

2人の息の荒さに少年探偵団はあきれていた。

と、そこへ…

「あらあら…平成のシャーロック・ホームズさんもやっぱり、息が荒くなるなんてかわいそうにねえ」

2人は、聞いたことあるような声だったので、恐る恐る振り返った。

「ええええええ！！あ、哀！？」

「何で…！？灰原…！？」

2人は相当驚いていた。

コナンはあまり、説明を聞いていなかったが、蓮華は48時間の薬のほずが、もうとつくに48時間過ぎているこの時間になぜ、まだ宮野志保に戻ってないのかが不思議でたまらなかった。

「どうしてえ！？だって…薬は…」

蓮華は哀とこそ話でやり取りし始めた。

「48時間言った理に戻ったんだけど、つぎは、一週間試すっていう実験よ、あんまりおどろかないでよね・・・」

哀はあきれ半分で言った。
哀が自分の目の前にいることにより、歩美は勢いよく哀に抱きついた。

「哀ちゃん！もう…会えないのかと思ったよぉ〜！」

「あなた…蓮華に謝ったんでしょっね？」

歩美にしか聞こえない言葉で哀は静かに言った。

予想外の言葉に、歩美はドキッとしながら、「うん…」といった。
哀はそれを聞くと

「よかった」

とつぶやいた。

そして、阿笠邸前から、アガサ博士の愛車、「ビートル」でドロペカルランドまで向かった。

実験の続き（後書き）

哀「吉田さん…謝ってくれたみたいね。」

鈴「そりゃ、本当はやさしい子ですから」

哀「事件起こさせたのは、あなたでしょ？」

鈴「そうだった？」

哀「とぼける気？（怒）」

鈴「すみません…」

蓮「まあまあ…」

哀「蓮華、あなたはお人よしすぎ。」

蓮「そう？ふつうでしょ！」

鈴「蓮華ちゃんの普通はあんまり信じられない…」

蓮「どういう意味？」

哀・鈴「そういう意味。」

蓮「は、ハア…」

とにかく、感想待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8299z/>

兄妹

2011年12月29日11時53分発行